他視点取得時における攻撃概念の情報処理

○常岡充子^{1, 2}・加藤毅典³ (非会員)・高野陽太郎²

(¹ 科学警察研究所・² 東京大学大学院人文社会系研究科・³ 東京大学大学院教育学研究科)

キーワード：攻撃，認知，他視点取得

Aggressive word processing in perspective-taking

Michiko TSUNEOKA^{1, 2}, Takenori KATO^{3, #} and Yotaro TAKANO²

(¹ National Research Institute of Police Science, ² The University of Tokyo Graduate school of Human and Sociology,

³ The University of Tokyo Graduate school of Education)

Key Words: aggression, cognition, perspective-taking

目 的

他者の視点に立つことを他視点取得(perspective-taking: PT)という。常岡・高野(2012)はPTを活性化させた後の言語的攻撃を測定した。その研究では、相手から徐々に強い言語的攻撃を受ける状況下において、PTを活性化しなかった参加者は相手に対して言語的攻撃を増したのに対して、PTを活性化させた参加者は言語的攻撃を増さなかった。そこで、本研究ではPTの活性化時における言語的攻撃の抑制の背景にある認知処理の特徴を調べることを目的とし、実験を行った。

方 法

予備調査 本実験で用いる単語を選定した。2名の評価者が各単語について攻撃性を5段階で評価した。合計した得点を各単語で算出し、得点が2〜3点の単語を中立語とした。また、8〜10点の単語で点数の高い単語を優先的に選択し、攻撃語とした。その結果、中立語280個、攻撃語40個を選定し、本実験で提示した。

参加者 PT条件(PT活性化あり): 22名(男性17名, 女性5名), 自己視点条件(PT活性化なし): 22名(男性15名, 女性7名)。

手続き 最初に常岡・高野(2012)と同じPT課題を行った。PT条件では、参加者に人の写真を提示し、その人の典型的な一日をその人の視点に立って考え、記述するという課題を行った。自己視点条件はPT条件と同じ写真を提示したが、行った課題はその人が参加者から見てどのような人物だと思うかを考え、記述するというものであった。課題の時間は5分であった。

続いて参加者の認知処理の特徴を調べるため、Probe Detection Task (PDT 課題)を160試行を行った。本実験におけるPDT課題の手続きはMacLeod, Mathews, and Tata (1986)に倣った。初めに、2つの単語を上下に並べて500ms提示し、参加者は上に提示された単語を声に出して1回読んだ。その後25msの間ブランク画面が提示された。80試行については、ブランク画面の後にプロンプトが提示された。参加者はプロンプトが上下どちらに提示されたかをボタン押しで、できるだけ早くかつ正確に回答した。提示されるプロンプトの位置は、上下とも40試行ずつであった。プロンプトが提示される試行における単語のペアは、中立語-中立語が40試行、攻撃語-中立語が40試行であった。残りの80試行ではプロンプトを提示しなかった。この試行では、単語のペアは中立語-中立語であった。

最後に参加者のPTパーソナリティと攻撃性パーソナリティを測定した。測定には多次元的共感性尺度(登張, 2003)と、日本語版Buss - Perry 攻撃性質問紙(安藤ら, 1999)を使用した。どちらも5件法であった。終了後、参加者から内観報告を受けた。

結 果

攻撃語が提示された試行におけるプロンプトの位置への反応時間をもとにバイアス得点を算出した。計算式は、{(下攻撃

語・上プロンプト)-(上攻撃語・上プロンプト)+(上攻撃語・下プロンプト)-(下攻撃語・下プロンプト)}/2であった。この式より、バイアス得点が正の値の場合は攻撃語に注意を向けており、負の値の場合は攻撃語に注意を向けていなかったと考えられる。分析では参加者を攻撃性パーソナリティ得点が高い参加者と低い参加者とに分け、バイアス得点を算出した。それぞれ人数は、PT条件の高群が10名、低群が12名、自己視点条件の高群が8名、低群が14名であった。

バイアス得点について、0と有意に異なるかを調べた。分析の結果、PTを活性化させたPT条件では攻撃性パーソナリティの高低にかかわらず有意差は見られなかった(高群 $t(9) = -1.28, n.s.$; 低群 $t(11) = 0.04, n.s.$)。自己視点条件では、低群においては有意差が見られなかったが($t(13) = 0.63, n.s.$)、高群においては0との有意な差が見られた($t(7) = -3.35, p < .05$)。これらの結果をFigure1に示した。

Figure1 バイアス得点
(エラーバー：標準誤差)

考 察

PTを活性化しない場合、攻撃性パーソナリティ得点が高い参加者では攻撃語に注意を向けないが、PTを活性化した場合はそのような注意の偏りが見られなかった。このことから、PTの活性化は攻撃性パーソナリティ得点が高い人に対して、攻撃概念に対する注意の偏りをなくす効果があることが示唆された。

引用文献

- 安藤・曾我・山崎・島井・嶋田・宇津木・大芦・坂井(1999). 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙(BAQ)の作成と妥当性, 信頼性の検討 心理学研究, **70**, 384-392.
- MacLeod, C., Mathews, A., & Tata, P. (1986). Attentional bias in emotional disorders. *Journal of Abnormal Psychology*, **95**, 15-20.
- 登張 (2003). 青年期の共感性の発達: 多次元的視点による検討 発達心理学研究, **14**, 136-148.
- 常岡・高野 (2012). 他視点取得の活性化による言語的攻撃の抑制 社会心理学研究, **27**, 93-100.